

## 明治天皇の還幸

## 郷土史家 西羽 晃

前回書いたように明治天皇は明治元（1868）年に東京へ行幸されたが、同年12月8日に東京を発って、往路と同じ東海道を通り、同月17日に熱田の尾張藩西屋敷で昼食および宿泊された。12月18日午前5時頃に、熱田を出発してから陸路を二女子村御用所・万場駅本陣・溝口友四郎方にて休憩、万場川は先の東幸の際は鳳輦だったので、幅1丈2尺の船橋で渡ったが、今回は輿だったので、幅9尺の船橋だった。さらに津島村御用所で小休止し、午前11時頃に佐屋宿本陣加藤五左衛門に到着されて昼食。

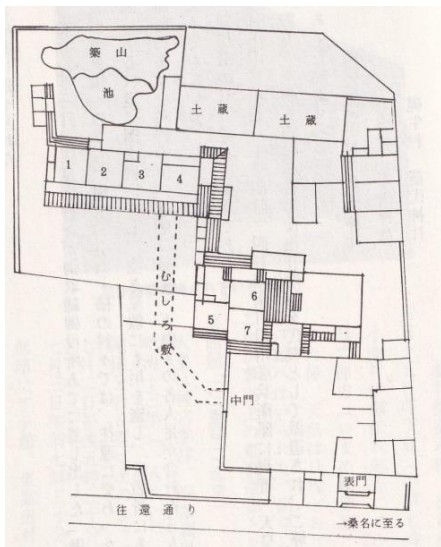
午後には船に乗り、桑名へ渡る予定だったが、天候が悪くて急いで佐屋泊まりとなった。約1800人ほどが急に泊まることになった。佐屋宿は本陣2軒、脇本陣2軒、旅籠31軒、家数290軒の小さな宿場である。そこへ予期もしない人数の宿泊となり、民家や近郷の村も総動員して、宿割りや布団5000枚の手配、食事の準備など大混乱になった。

翌朝は天候も回復して快晴となり、午前3時頃に佐屋宿を出発し、焼田から松明をつけて乗船して、夜明け頃に桑名に着いた。この日は御座船・白鳥丸はじめに尾張藩提供の松丸、竹丸、梅丸、鶴丸、本王丸、光陰丸、菊栄丸、俊剛丸、朝日丸のほか306隻の舟が佐屋宿および近郷から提供された。なお関連した前後の通行のため、12月12日から翌年1月4日まで（当日を除いて）88隻が佐屋宿から提供された。この他に熱田から直接に桑名へ渡った船もあったと思われるが、史料がない。桑名では大塚本陣で小休止されたが、細かな史料が残されていない。大塚家では天皇の休泊された宿帳を大事に保存していたが、

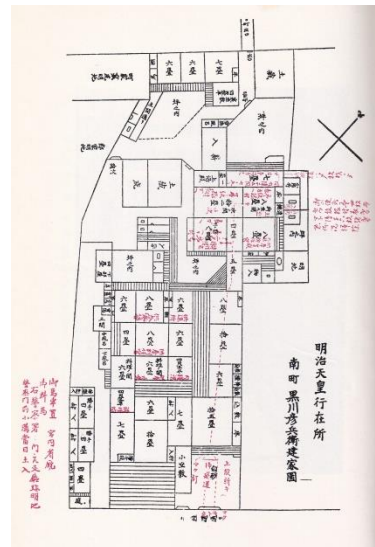
昭和 20（1945）年に名古屋空襲の際に焼失したとか。

桑名藩は新政府軍の占領下に置かれており、何かと苦勞も多いただろうと、天皇から還幸に際して見舞いの金品が与えられた。それは桑名藩継嗣の松平万之助（後の定教）と母（珠光院）、姉（初子）、妹（高子）を合わせて4人に1年間の米 500 石、藩士の女性たち 1 人につき 2 人扶持の米、さらに万之助および藩士に馬の飼育料及び必要な大豆、野菜代が与えられた。

大塚本陣で小休止してから、小向村の庄屋・伊藤伝八郎宅、東富田村・広瀬五郎兵衛宅で休憩して、四日市宿本陣・黒川彦兵衛宅で昼食された。その日は関宿本陣・川北久左右衛門宅で宿泊されて、同月 22 日に京都へ帰着された。



小向村・伊藤伝八郎宅  
下が東海道、右が桑名  
（『朝日町史』1974年版より）



四日市宿・黒川彦兵衛宅  
（『四日市市史』1973年版より）